

現代日本キリスト教文学全集 17 「聖書の世界」

著者 椎名麟三・遠藤周作・小川国夫

発行者 武藤富男

発行所 株式会社 教文館

一〇四・東京都中央区銀座四一五一
振替・東京一一三五七・電(五六)八四四六

印刷所 伸光印刷株式会社

昭和四九年 四月一〇日 初版発行

乱丁・落丁はお取り替えます

© 1973

配給元 日キ販 東京都新宿区新小川町3-1 振替・東京60976
電話 (260) 5664 (代)

0393-625170-6100 (日キ販)

聖書の世界

現代日本キリスト教文学全集

17

教文館

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

装
幀
熊
谷
博
人

目次

私の聖書物語……………	椎名麟三……………五
聖書のなかの女性たち……………	遠藤周作……………三
ともに在りし時……………	小川国夫……………二五
解説……………	武田友寿……………二〇三

私の聖書物語

椎
名
麟
三

処女受胎

1 クリスマス

私は、出版社の用事もすんだので、家へ帰ろうとして銀座を歩いていたら。久しぶりの銀座は、相かわらずの人出であつた。そのとき私は、思わずぎよつとして上から落ちてくる何かを避けるようにしながら足をとめた。巨大な黒い雲のようなものが、私の頭の上へ落ちかかつて来たような気がしたからである。

だが、それは超特大製のサンタクロースのおじいさんだったのだ。彼は、デパートの高い窓から突き出た棒にまるで吊し首にでもされているようにぶら下げられながらも、どんな目に会つてもそうしていなければ神の命令にそむくとでもいうように、かわいそうにニコニコ笑っているのだ。例の赤い着物をきて、白いひげを生やしてである。

私は、しばらく彼を見上げてから、彼の股の下を通つて行った。通行人たちはみんなそうしていたからである。彼が生きていたら、きっと人権蹂躪で訴えられるだろうと思つた。

その朝の新聞では、識者といわれるえらいひとが、クリスマスって何の意味だか知っているかというようなきびしい調子でこのようなクリスマス風景を叱りつけていた。だが、同じ新聞の社会面では、皮肉にも、そんな識者の言葉をからかうように、今年には戦後でも一番にぎやかなクリスマスになるだろうと報ぜられていたのである。

もちろん、私たちは、クリスマスは降誕節と訳されているが、それは決してサンタクロースじいさんのお誕生のお祝い日ではなくて、キリストのそれであることぐらいは知っている。だが、もしサンタクロースのかわりに、あの十字架にかかつて死んでいる悲惨なキリストの超特大製の像をデパートの入口にかざったとしたらどうなるか、と想像すると微笑をとめることができない。恐らく、デパートへ入つて来た客は、入口の像にびっくりして逃げだすにちがいないからだ。というのは、キリストのあの不思議な誕生も、またあの理解しがたい復活も、十字架のキリストに

よって示されているからである。このことは、この文章をつづけているうちに、わかっていただけるよう努力するつもりである。

だが、私は、識者がクリスマス風景を責められるのは、まことにもつともだと思わずにはおられないのだ。むしろはなはだはつきりと、情ないくだらない風景だと思う。なぜならサンタクロースは、一千六百年あまり前のキリスト教の司祭だったのに、肝腎のキリストのお株をうばっているように見えるからだ。もちろんかわいそうに彼の罪ではない。彼が知ったら、足をふまれた犬のように悲鳴をあげてとび上るにちがいないからだ。それに彼は、売笑婦になろうとしている三人の娘を全財産を投げ出して救うというような慈善にとんだひとだったにしろ、それだけにすぎないからだ。このようなひとは現在わが日本にもたくさんおられる。売笑婦に関して言えば、三人どころか全国の何万という売笑婦を救おうとしているひとも多いのである。

ことに東京の夜の酒場やキャバレーなどのらんちきさわぎとなると、まったく醜態だ。農村の方は御存知ないかも知れないが、とてもひどいものである。サラリーマン氏が、変な紙の帽子をかぶされて、手には子供のように風船

をもたされながら、街をよるめいている図は、一種の道化芝居だ。それにもかかわらず、それらの風景に私がほんとうに腹を立てているかと問いつめられれば、そうではないと答えるより仕方がないのである。口をきわめて非難すべきだと思い、またそうしていながら、ほんとうにはそう思っていないのである。そしてほんとうにはそう思っていないという点が、世のえらい識者と私とちがうところかも知れない。というのは、ほんとうには私は彼等に腹を立てる必要はないのだということを知っているからである。それだけでなく、このようなクリスマス風景のなかにさえ、キリストの意味が私に強く感じられてくるのだ。

なぜなら私にとって、キリストは、一口に言えば、生々と生きよという言葉であるからである。彼は、いろんな苦しみやなやみや不安や恐怖などで、貧乏くさくしか生きて行くことのできない私たちに、もっと生きることができるといふことを、もつとゆたかにもつと多様にたくさん生きることができるようになされているのだといふことを身をもって示しているからだ。いいかえるならば、キリストは、いろんな苦しみやなやみなどに人間性をうばわれて、貧弱にしか生きて行けない私たちに、人間性をとりかえそうと

してやってきた方であるからだ。

だから、先ず生きていなければ生きて行くということができないように、先ず私たちに人間性をとりかえされていなければ、この現代のような、私たちから人間性をうばっているさまざまな政治的な社会的な諸問題に対してほんとうにたたかって生きて行くことはできないということともたしかであるだろう。

だがキリストは、人間が彼によってすでに人間性を回復されているという告知だったのである。ところが、いままでキリスト教と知られているものは、日本の法律以上にさまざまな禁止事項を設けて、たださえ失われている人間性をさらにうばう役割しか果たしていなかったように思われる。あのチャタレイ裁判で有名な『チャタレイ夫人の恋人』の原作者のローレンスに、その作品を書かせたのは、このような人間性をうばうキリスト教に対する怒りであったということからも想像されよう。そしてまた、このごろは、だんだん少なくなって来たように思われるのだけれども、クリスチャンといわれるひともっている、あのいかにも罪ぶかげな態度からくるクリスチャン臭とでもいうべき一種の臭気からも、キリスト教がどんな働きをしていた

かが察することができるよう。

だがいままでのキリスト教を非難するからと言って、じゃあ、お前は、キリスト教をよく知っているのかと問われると、残念ながらほとんど無知であると白状申し上げるより仕方がない。だから非難は、まとはずれかも知れない。ただ私の知っているのはキリストだけである。それも聖書に書かれているキリストだけである。たとえば、キリストの誕生日が十二月二十五日であったということは、キリスト教の学者の誰にも信じられていない。三月だったとも五月だったとも八月だったとも十一月だったともいわれて異説さまざまなである。また私は、ローマの冬至祭がキリストの降誕節に変化したのだとも教えられている。

だが、そのようなことは、たしかに私には興味のあることではあるが、またそうでもないのだ。私にとってキリストが問題となるときは、聖書におけるキリストだけだからである。キリストにひげがあったかなかったかなど、その私には何の興味もないのである。そして聖書におけるキリストは、この世に対する勝利であり、同時にそのことは、この世に対する人間の勝利でもあることを私に示してくれたのである。

この聖書に関する文章に、わざわざ私のと銘打ったのは、以上の意味においてである。この「私の」ということがききによって、私には聖書において私に示されているキリストしか語り得ないという限界も同時にあらわしたつもりなのである。

私は、自分の生き方に行きづまって、一番いやなものに近づくように聖書へ近づいたのである。このことは、後にふれるつもりでいる。まえがきばかり長くなかなか本題に入れないからだ。だが、最初、私には聖書を何回読んでみても、始末におえないほど不合理なもののように見えて、信ずるなんて思いもよらなかったのである。聖書にいわれているようにさかんにつまずいていたのである。

だから、この私の聖書物語は、そのつまずきの記録としたいということが私の第一のくわだてである。しかしそのつまずきが現在の私にどういう風に見えるか、そしてまたそれが現代に生きようとしている私の諸問題に、どんな光をなげかけるかを語ろうとするのが第二のくわだてである。

2 ふしぎな夢

私が、聖書を読んで、最初にひっかかるのは、処女であるマリヤからキリストが生まれたところである。マリヤは、そのときヨセフという男と婚約中だったが、聖書は、一回も一緒になったことはなかったとわざわざはっきりことわってあるからだ。じゃ、マリヤは、どうしてキリストをはらんだのか。それは、聖霊によるのだというのである。

処女というのが、男とまじわらないということであつたら、処女が妊娠するということは、現代においては何の不思議もない。処女に人工授精させればいいからだ。そしてこの処女で子供を生むということは、二十数年ほど前、アメリカに流行していることが報ぜられ、アメリカではなく日本の一部の男性に恐慌をきたさせたことがあつた。そのときの新聞の報道が真実だとすれば、アメリカでは何人かのキリストが生れたことになり、なかには兵隊になつていまごろ鉄砲をかついで訓練を受けているおかしなキリストもいるにちがいないのである。

だが、キリストは、聖霊によって妊娠したというのである。しかも残念なことは、夢にあらわれた天使の言葉以外には何の証拠もないということなのだ。

マタイ伝にはこう書かれている。「(ヨセフに) 主の使いが夢に現れて言った、『ダビデの子ヨセフよ、心配しないでマリヤを妻として迎えるがよい。その胎内に宿っているものは聖霊によるのである。彼女は男の子を産むであろう。その名をイエスと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである。』」

その夢のほかには、マリヤが聖霊によって身ごもったという証拠はなにもないのだ。その夢はマタイ伝だけはヨセフだけとなっているが、他の福音書は、マリヤも夢のなかで主の使いからお告げをこうむったことになっている。だが、夢がほんとに証拠になるかと考えてみると、これほど危い話はない。もし検事に、そんな覚えもない私が人殺しをしたということを夢に見られて、それが公判で証拠として認められたりしたら、私としては泣くに泣けないではないか。

世間には、夢みたいな話というものはあることはある。周囲のひとも自分も駄目だと思っていた試験に合格してい

たり、健康を信じられていたひとがふいになくなったり、片想いだとあきらめていたひとから思いがけなく恋を打ち明けられたり、このあいだ新聞にでていたが、英国の誰かがなくなつて日本の誰かに巨万の遺産がころげこんで来たりしたときなど、夢みたいな話かも知れない。しかしよく考えれば、ちゃんと公判廷でも通用する立派な理由というものがあった、夢だと思ふのはそう思う当人には考えられないことだったというだけなのである。

しかもこの夢というやつは、聖書ではなかなか重要な働きをしているのだ。ヨセフは、イエス(大工ヨセフの子としてのキリストの名)を抱いて、ユダヤのベツレヘムからエジプトへ逃げだしたり、エジプトからイスラエルへ逃げだしたり、ガリラヤのナザレという町へ行ったりしているのであるが、その行動はすべて、夢のなかのお告げによってであるということになっているからである。また、イエスが生れたとき、東から来た博士がイエスをたずねてくるのであるが、彼等も夢のお告げによって行動しているのである。

私は、最初、この夢に腹を立てた。卑怯な逃げ口上と思えたのである。夢のせいにすれば何でも正当化されると思

っているらしいからだ。

しかし私は、馬鹿だから、そして自分のおちいっている生きる道のない現実からどうしても逃れようとして何回も読みかえした。まったく当時は、自分の全存在をささげて愛している恋人からでもすてられたように、眼の前が真暗になっていたのである。それは当然なのであって、私がそれによって生きているこの人生からすてられてしまったような気がしていたからである。

だが、何回読んでも、その夢に腹がたつばかりなのだった。そして腹がたてばたつほど一方、その夢に理由の拒絶と言ったようなきびしさも感じ始めていたのである。聖書のように夢でお告げを受けたんだから仕様がなないじゃないかということは、だから確かな理由なんか一つもないんだと言ってそっぽを向かれているのと同じことだったからである。そして聖書は、いろんな預言者の言葉を引き合ひにだして、聖霊によるイエスの誕生というものを正当づけてはいるけれど、結局のところ、理由がないということと同じなのだった。

3 人間の条件

このように、理由がないということは、私を打ちのめした。それは私の一番恐れていたことでもあったからである。なぜならこの人生においてそれだけはほんとうだと思われるものは、大抵理由もなく存在していて決定的な力をもっていたからである。

私は、小さいときいうことを聞かないで、不幸な母に、お前みたいなのやつは知らないと言って叱られたとき、こう言って反抗したことがある。

「じゃ、なぜぼくを生んだんだ。」

すると母は、こう答えた。

「犬や猫に産まなかったんだから、仕合せだと思いな。」

私は、それでぎゅっとなつてしまつて、それ以上一言の文句もいえなかったのである。たしかに母のいう通りだと思つたからだ。しかしどこか大切なところでだまされているような気もしていたことは事実である。その後、私は労働者になり、戦前の非合法時代の共産党员として活躍し、おきまりの検挙にあつて獄に投ぜられた。だが、つらいと

きや不幸なときに、漠然とこの自分というものが生きていくということがふしぎな気がしていた。たしかに私は、両親によって生れたのであり、進化論的には、私の祖先は猿であり、さらにアミューバーから生きていない物質までたどることができる。だが、それにもかかわらずこの私という人間が、生んでもらいたいとも思わなかったのにこうして生きているということは、どうしても理解できないふしぎな感じがしていたのである。

これと同じようにもう一つの否定できないふしぎな事実だと思われるものに、現に私がここにこうして生きているという事実のほかに、私という人間は、いつか死ぬという事実がある。

これも私には、ほんとうの理由なんてわからないのである。今まで生きて来た人間は、兆をもってしても数えられないだろう。しかもそれらの人間は、ひとりぐらい例外があってもよさそうなのに、ひとり残らず死んでいるのであるから、当然私も死ぬらしいことは確実である。そして科学はそれについて私の納得の行く説明をあたえてくれる。母になぜ生んだのかとたずねてやり込められたときと同じように、その説明になるほどそうだと思う。だが、心の奥

底ではどうしてもそう思えないのだ。なぜなら、死にたいと思わないのに、どうしてか私は、死ぬようにきめられてしまっているからだ。

どんな科学的な、どんな宗教的な理由をあげて、私の死は自然なものであり当然なものであるといわれても、どうしても、はい、そうですかといえないものが私のなかにあるのである。いいかえればどんなもつともらしい理由を百もならべ立てられたって、そんな理由は、私には、ないも同然なのである。なにしろ困ることに、死ぬのは誰でもなくこの私なのだからだ。死ぬのは、ほかの誰かであって、この私だけは死なないのであるなら、私にだって、科学や宗教などのあたえてくれるもつともらしい理由というものは、ある程度平気で受け入れることができるかも知れないだろう。だが、事実はそうでないのだ。

愛についても同じである。人類が子孫を残すためにあるのだとか、生物学的な必然性としてあるのだ、などと教えられてきた。そして私もそういわれればなるほどと思う。だが、愛の行動を、自分のせいではなくて、それらのもつともらしい理由のせいだとすると、私は愛する気力もなくなってしまうにちがいない。それでなくても、誰かが自分

の愛を三つの理由で説明しだしたりしようものなら、滑稽なものになってしまふものなのだ。もしあなたが、誰から求愛されて、

「ぼくがあなたを愛するのは、あなたの顔が美しいせいですよ。嘘だと思ふならA子さんくらべてごらんさい。第二にぼくがあなたを愛するのは、あなたがそろばんがうまいせいですよ、何百人といううちの会社で第五位なんですからね。ぼくのあなたを愛する第三の理由は、これはとても素晴らしいものなんだ。それはB君があなたのことを批評して、頭がいいといったせいなんだ。」

といわれたらどうだろう。むろんどの理由もあなたを賞めているのだから嬉しいという気がなさるだろう。しかしきつと心の奥の方では、このひとはほんとうにはわたしを愛していないのだという空虚なものを感ぜられるにちがいないことも確実なのである。

愛というものは、最後には愛しているというより仕方のないものであるからだ。愛は、愛それ自身をもつてしか説明できないものなのだ。というのは、愛は、どんな理由も必要としないだけでなく、むしろすすんでそのような理由を拒むものなのであるからだ。

自由というものについても同様なのである。一口に言ってしまうと、愛というものは、究極には理由のないものであるならば、自由というものも究極には、理由のないものである。後にふれるだろうが、いまは、自由がそうなのは、愛と自由とはふかい関係があるからだだけ申し上げておこう。

人間の真剣なことがらというものは、とどのつまりは理由なく存在しているのである。それはどんなにたずねても答えのないものである。そして私は、そのことに人生の不条理を感じるのである。

だがイエスの誕生の場合けちゃんとして理由がつくられている。ただその理由は人々に納得されないものだといふだけなのである。理由はないというのではないのだと逃口上をつくっているように思われるのだ。むしろ私は、理由がないというきびしさのほうをえらんだらうに、卑怯にもその点を逃げていたのである。しかもたしかにその折角の理由も、人々に納得されないということによって残酷なものとなる。全くもしマリヤが聖霊によって身ごもったのが事実だとすれば、私には、神はなんといいむごいことをするのだろうと思われたのである。マリヤにとつてもヨセフに

とってもひどい災難だったにちがいないからだ。聖霊によ
って身ごもったんだと言ったって、まさに世間のひとは誰
も納得してくれなかったにちがいないということによつて
だ。

マリヤは、ロマの兵隊にでも強姦されたんだろうという
ひともあるが、その二人にとってその方がまだしもすくわ
れたであろう。それにはとにかくひとの納得できる理由と
いうものがちゃんとあるからである。